

大学院修了にあたって

大学院修了にあたって

歯周診断・再建学分野 板垣 真奈美



私はこういう文章を書くのはすごく苦手で、依頼がきても断ろうと思っていたのですが、断りきれず締め切りを目前にし、パソコンに向かっていきます。中学生

のときも、卒業式の送辞を担当の先生に頼まれたのですが、文章が苦手なので嫌だと言って、担任の先生に書いてもらったくらいです。

学部学生の中には、臨床のみならず研究にも興味があり、これから30~40年間続くであろう歯医者生活のうちの4年くらい寄り道してもいいかな、といった軽い気持ちで、あまり深く考えず大学院に行こうと決めていました。どの科に進むかは総診のときにお世話になった先生方や、部活の先輩方に相談にのっていただいて、研究内容に興味のあった、歯周診断・再建学分野（以下歯周）に進学しました。

歯周では、最初の1年間ほとんど毎日臨床のアシスタントとその合間にPCR（Polymerase chain reaction：DNAを増やす手法）をするような生活をしていました。私が最初にやった研究は、わかりやすく言えば、「患者様の血液からDNAを採取して、MMPという酵素の遺伝子型を調べて、歯周炎のなりやすさと関係があるかを調べる」というものでした。私が実験を始めるころにタイミングよくいいサーマルサイクラー（PCRしてくれる機械）が入ったので、一度に96サンプルのPCRができ、あっという間に約800サンプルもの遺伝子型判定ができました。研究初心者である私にとってすべてのことが新鮮で、血液からDNAがとれたり、電気泳動してバンドが

見えたり、そういったことひとつひとつに感動していました。

その後、大学院2年目の夏から、組織学的手法を口腔病理学分野（以下病理）でご指導いただきました。病理では、まず切片を切れるようにならないと実験がすすみませんので、まず薄切とHE染色の練習から始まりました。そして、出来上がった切片について朝先生のOKがもらえてようやく次のステップに進めました。私は怠け者だったので、OKがもらえるまでに4ヶ月かかりました。抄読会も、3時間やってダメ出しがあるなど、一人では乗り越えられないくらいつらいことも多々ありました（もとは私の努力不足なのですが、ちょうど同じくらいの時期に口腔外科から病理に研究に来ていた同期の小林くんのおかげで、何とか乗り越えられたと思います。毎日薄切していた頃（ちょうど加齢歯科の稲垣くんの結婚式の頃でした）、二人で円形脱毛症になったのも今ではいい思い出です。

病理では、免疫染色やin-situハイブリダイゼーションなど、組織学的手法が主の研究テーマを与えていただきました。また、動物実験もさせていただきました。PCRなどの分子生物学的な研究と比較して、結果が目で見えてわかり、そこからいろいろな考察ができる形態学の面白さも学ぶことができました。

大学院生活では、いろいろなストレスと戦う毎日でしたが、ときどき飲みに来て行ってくれる先輩方や、口腔外科や加齢歯科にいる大学時代の同期、また同じ歯周での同期の肉（焼肉・しゃぶしゃぶ）仲間のおかげで、日々を乗り切れたと思います。おかげで、お酒はもともと好きでしたが、大学院の4年間でだいぶお酒にも詳しくなりました。1年365日中300日以上はお酒を飲むようになりました。その結果が胃カメラも飲みました。胃カメラ飲んでもお酒はかかさず、乾杯のビールとともに胃薬も飲むなんて、お医者様には怒られそ

うなこと、平気でやっていました。ごめんなさい。

あまり考えずに進んだ大学院でしたが、私のわがままでいろいろなことをやらせていただきました。臨床についても研究についても学ぶことができ、学生教育にも参加させていただき、いろいろな先生方とのつながりもでき、英語の読み書きもある程度はできるようになり、国際学会にも参加させていただき、と4年間で得たものは数え切れないほどです。しかしながら、開業医で働いている同期の友人の話を知ると、自分自身の臨床面での未熟さに焦り、私の選択は間違っていたのだろうかときどき不安に思うこともありましたが、大学院に進学したことは私の人生にとって大きなプラスになったと感じています。

大学院に進学するときから、現在まで、歯周、病理の先生方のみならず、その他たくさんの先生方に大変お世話になりました。その方々のご協力、ご支援なしでは、ここまでこれなかったと思います。本当に感謝しています。今後も大学院生活で得た貴重な経験を生かしてがんばっていきたいと思います。

大学院修了にあたって

加齢歯科補綴学分野 中 舘 正 芳



僕が当時の第二補綴科（現：加齢歯科補綴学分野）の大学院にお世話になろうと決意したのは、6年生になり、総合診療部での治療を始めて間もない頃だったと記憶しています。

卒後、ある程度の期間は大学に残ろうと思っていたので、それなら一度研究というものに触れてみるのも良い経験になるだろうと思い、大学院に進むことにしました。また、自分としては総診で一番苦労したと思う二補綴を選択したのは、周りに流されやすく、意思の弱い僕にとっては、厳しい環境に我が身をおいた方が成長できそうな気がしたことと、いずれは総診ライターの先生みたいに臨床をバリバリやれるようになりたい、とい

た理由からだったと思います。

大学院生としての4年間では、本当に色々な経験をしました。振り返ってみて最初に思い出されるのが、同門会という二補綴のOBの先生方との懇親会で行う、新入医局員によるアトラクション（芸）でした。もともと、人前に出て何かをすること自体が苦手だったので、何をしようか本当に悩みました。今までの人生の中で一番頭を使ったというくらい考えたのですが、残念ながら最後まで笑いの神様が降りてくることはなく、本番ではとてもつらい現実が待っていました。しかしそれ以来、あの日の惨劇に比べれば……、という妙な度胸が付き、学会等で発表する際には以前よりあがらなくなった気がします。どんなことでも実際にやってみることで何かしら得るものがあるということでしょうか。大学院4年間では、この他にも数多くの経験をし、そのどれもが現在の自分に役立っているのではないかと思います。

そろそろ、研究の話に移りたいと思います。僕の研究は、二補綴の先輩がやっていた動物実験に、アシストとして入らせてもらうことから始まりました。この動物実験というのは、1回やると2～3時間程度かかるものでしたので、実験中には大学院生としての心構え、動物実験の難しさ、研究の楽しさなどを教えて頂きながら自分なりに大学院生像を思い浮かべていました。その後、インプラントと骨補填材というテーマで当時の第二口腔解剖（現：口腔解剖学分野）にお世話になり、先輩、後輩に手伝ってもらいながら自分でも動物実験を行うようになりました。初めのうちは、試料を作って顕微鏡を見るということだけで大満足だったのですが、なかなか期待通りの結果が出ずに、思い悩みながらひたすら研究室と動物舎を往復する日々を送ったことが思い出されます。しかしよくよく考えてみると、動物実験をやるにしても一人ではできないわけですし、最終的に学会報告、学位論文まで提出できたのは、二解剖、二補綴の諸先生方のアドバイスによって良い方向へ導いて頂いたおかげだと思いますので、本当にたくさんの人のご協力があった修了できるのだということを実感しています。また、なかなか思うようにいかないながらも自分なりに試行錯誤していくという

過程自体が、実は大学院の中で最も有意義だったのではないかなとも思います（先輩の受け売りですが……）。今後基礎研究に限らず、歯科治療をはじめとして色々な課題が出てくるとは思います、大学院での経験を活かしていけば、なんとか乗り越えていけるのではないかなと思っています。

最後になりますが、大学院修了にまで何とかたどり着くことができたのは、加齢歯科補綴学分野、口腔解剖学分野の諸先生方のご協力があったこそだと本当に感謝しております。大学院修了後もお世話になることが多いと思いますが、何卒宜しくお願いいたします。

大学院修了にあたって

小児歯科学分野 沼 奈津子



早いもので大学院に進学してから4年の月日が経ちました。6年生の夏休み前に大学院入学の案内が掲示された頃、漠然と小児の治療ができるようになりたい、大学院で研究というものをしてみたいと思い、小児歯科の野田教授と口腔生化学の織田教授の研究室を訪ねました。小児歯科で臨床、口腔生化学で研究という組み合わせは私が初めてだそうですが、多くの進路先の中で、新大に残り、大学院に進学して小児歯科と口腔生化学にお世話になったのはまさにご縁があったのだと思います。

大学院は、大きく分けると研究、臨床、そして（若干の）教育の3つを経験し、学ぶような4年間でした。入学当初は新しいことばかりで、何をすることも時間が掛かり、ただ大学に長時間いるような生活でした。寝不足が当たり前、ときには体調を崩したこともあって、研究室の先生からは体力がないと言われました。そんなとき織田先生から、研究は息の長いものですからあせらずに健康に留意してやり続けてみましょうとお言葉を頂いたのはとてもありがたく、強く印象に残っています。

研究生生活の前半は主に、天谷助教授に教えて頂

きました。研究先は、学部生の5年時に（現在はもうなくなったようですが）教室配属というカリキュラムでお世話になってからなじみのあった場所でしたが、大学生の頃のように、もうお客さんではありません。実験には、その前後に準備と後片付けが必要で、それは実験以上に手間と時間が掛かり、また正しいデータを得るには実験と同等以上にそれらが大切であることを学びました。教育としては、2年生対象の細胞生物学実習にティーチングアシスタントとしてお手伝いしました。学生の皆さんの様子から、自分が学生だった頃と同じでその気持ちがよく分かり、実習準備と後片付け（結構大変なんです）をすると先生方のご苦労も実感したりと、両方の視点から見ることもできたとても貴重な経験でした。

生化学の研究室での最大のイベントは、毎週月曜日に行われる論文抄読のセミナーです。その場ではほとんどが専門用語（しかも略称）で会話がなされ、ディスカッションが繰り返されているため、英語、日本語に関わらず最初の1年間くらいは全く何を話しているのか分かりませんでした。一見、自分の研究テーマとは関係ないようなもの（実際はとつても関係してくるようですが）をどこまでも深く掘り下げて勉強して発表されている先生方の前で、寝るつもりはないのに何度気を失っていたことでしょうか。恐れながら2年目に入った頃から、自分もセミナーを担当するようになってしまいました。英語の論文を辞書で全訳しても、その研究の背景から勉強しないとさっぱり意味が分かりません。準備には相当の時間（2、3週間は呪縛が続きます）を掛けるわけですが、さらに勉強したことを正確に聞き手に伝えるにはその何倍も理解していなければならず、学部生の頃とは比較にならないほどよく勉強をしました。（まあ、自分なりに、ですが。）

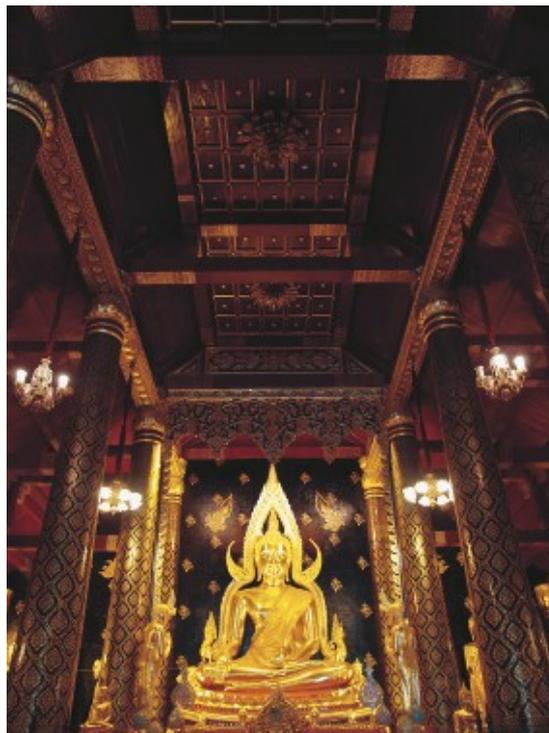
学位研究のテーマについては織田教授から直接御指導をして頂きました。織田先生の実験体力（精神力）はまさにアスリートで到底真似できるものではありませんが、複数の実験を掛け持ちしながら、その合間にデータをまとめ、考察し、また次の実験計画を立てるといった研究者なら誰しもが行っている研究生生活のリズムをつかむことに集中し

ました。少しずつではありますが、1年目の頃に比べるといろんなことができるようになった気がします(たぶん錯覚です)。とはいえ、研究の道は果てしなく長く、険しいと感じています。

周りの多くの先生方に助けて頂きながら、研究だけではなく臨床の勉強も始めることができました。入局1年目は、野田教授の診療を見学する機会を与えて頂きました。患者様とその付き添いのお母様が先生のお顔を見ただけでホッとして笑顔になり、治療後も笑顔で帰って行かれるその光景に、長年築いてきた患者様との信頼がいかに大切であるかを学びました。小児歯科の外来は普段は小さい子供の患者様が多く、長期の休みに入ると小中学生の患者様で大変込み合うわけですが、諸先生方の手際のおよさには、横でアシスタントしようにも間に合わないほどでした。2年目の後半頃には、休みごとに顔を見せてくれる患者様を少しずつ担当させて頂き、診療の前後には学校のこと、部活のこと、そして進路についての話を聞かせてもらうようになりました。また、新潟市内よりもまだまだ虫歯の多い地域に行く出張先では、医院が1日小児歯科医院に早代わりして、大変多くの

患者様が来院されます。しばらくはアシスタントとして見学に通い、その際やはり先輩の先生方が頑張っている患者様に声を掛けながら、冷静かつ沈着でも医院中を飛び回る(かのように見える)様子で診療をしている姿に、これはすごい特殊技能だと改めて驚き尊敬しました。今では緒先生方の暖かいご指導の元、実際治療にあたり研鑽を積む日々です。

このような充実した4年間の大学院生活を自分の思うままに過ごすことができたのも、全て周囲の方々に支えて頂いたからこそ実現できました。まさに感謝の一言に尽きますが、特に浪人2年、大学6年、大学院4年と、ヒトの約3倍大学に通った私を応援してくれた家族に感謝しています。将来自分に子供が生まれたり、果たして子供に(私のように)30歳になるまでも学生をさせてあげられるとは到底思えません。全てを教育に懸けてくれた両親を心から尊敬しています。今、大学卒業から4年の月日が経って、ようやく歯科医師として一社会人としてスタートラインに立ったような私ですが、これからも感謝の気持ちを忘れずに臨床も研究も精進していこうと思っております。

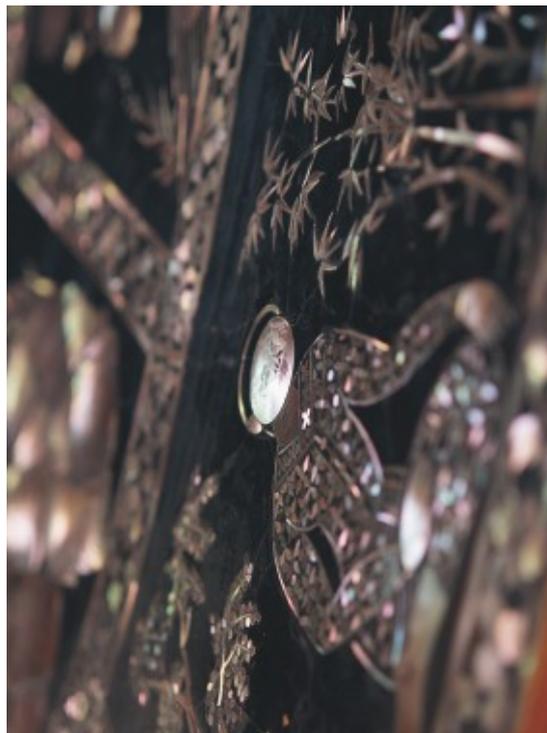


平成17年度 大学院医歯学総合研究科博士課程修了者論文名

博士の専攻 分野の名称	氏名(専攻)	博士論文名
博士(歯学)	木 島 寛 (口腔生命科学専攻)	Nitric oxide modulates elicitation of reflex swallowing from the pharynx in rats (ラット咽頭における嚥下反射誘発機構への一酸化窒素の関与についての研究)
博士(歯学)	沼 奈津子 (口腔生命科学専攻)	突然変異型組織非特異型アルカリホスファターゼ(V406A)の解析
博士(歯学)	八 木 和 子 (口腔生命科学専攻)	Changes in the mouthful weights of familiar foods with age of five years, eight years and adults. (5歳児、8歳児、成人における一口量の変化)
博士(歯学)	川 岸 恵理子 (口腔生命科学専攻)	Pulpal responses to cavity preparation in aged rat molars (高齢ラット臼歯窩洞形成後の歯髄反応)
博士(歯学)	中 館 正 芳 (口腔生命科学専攻)	Histological Evaluation on Bone Regeneration with Self-Setting Alpha-TCP Cement at Dental Implant Placement Sites (インプラント周囲の骨再生に関する組織学的検討～自己硬化型 α -TCPセメントの応用～)
博士(歯学)	黒 川 亮 (口腔生命科学専攻)	インテグリン β 4の遺伝子発現は舌扁平上皮癌の遠隔臓器転移と転帰の予測に有用である
博士(歯学)	小 玉 直 樹 (口腔生命科学専攻)	rhFGF-2含浸ゼラチンハイドロゲルの組織内徐放を用いたマウス上顎骨皮質骨新生とその機序の解析
博士(歯学)	小 林 孝 憲 (口腔生命科学専攻)	Carcinoma in-situ of the oral mucosa: its wide variations of histology evaluated objectively by immunohistochemistry for cell proliferation and differentiation. (口腔粘膜上皮内癌の病理組織学的多様性:細胞増殖・分化の免疫組織化学をもちいた客観的根拠に基づく診断基準の策定)
博士(歯学)	奈良井 省 太 (口腔生命科学専攻)	p53 affects the developmental anomaly of clefts of the palate in irradiated mouse embryos, but not clefts of the lip with or without the palate (放射線照射下においてp53遺伝子は口蓋裂発生に寄与する)
博士(歯学)	西 澤 理史歩 (口腔生命科学専攻)	MMP-1 遺伝子多型は口腔扁平上皮癌の易罹病性に関連する
博士(歯学)	齋 藤 米 蔵 (口腔生命科学専攻)	頭部屈曲・回転運動時の関節可動域と運動軌跡の解析
博士(歯学)	古 里 美 幸 (口腔生命科学専攻)	片側性唇顎口蓋裂患者の成長発育に伴う外鼻形態の変化について
博士(歯学)	丸 山 裕 子 (口腔生命科学専攻)	Neurotrophin-4/5-depletion induces delay in maturation of the periodontal Ruffini endings in mice (Neurotrophin-4/5遺伝子欠損マウスにおける歯根膜ルフィニ神経終末の成熟遅延について)
博士(歯学)	八 幡 誠 (口腔生命科学専攻)	下顎骨偏位と下顎頭位および下顎窩形態との関連性について—ヘリカルCTによる検討
博士(歯学)	渡 辺 厚 (口腔生命科学専攻)	永久歯列完成期におけるIndex of Orthodontic Treatment Need (IOTN)を用いた不正咬合の疫学調査
博士(歯学)	稲 垣 大 悟 (口腔生命科学専攻)	Influences of body positions on anterior tongue activity during swallowing in normal adults (体幹角度の変化が嚥下時ヒト舌前方形舌筋活動に与える影響の研究)
博士(歯学)	吉 津 和 憲 (口腔生命科学専攻)	嚥下反射誘発時の呼吸関連筋活動の変調

博士の専攻 分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	渡部 守 （口腔生命科学専攻）	Measurements of several metallic elements and matrix metalloproteinases (MMPs) in saliva from patients with taste disorder 味覚障害患者唾液における微量金属元素およびマトリックス金属プロテアーゼ (MMPs) の測定
博士（歯学）	板垣 真奈美 （口腔生命科学専攻）	Matrix metalloproteinase-1 and-3 gene promoter polymorphisms in Japanese patients with periodontitis. （日本人歯周炎患者におけるマトリックスメタロプロテイナーゼ-1、及び-3 遺伝子多型の解析）
博士（歯学）	喜多 美知子 （口腔生命科学専攻）	有病高齢者における PMTC が歯周組織及び、唾液、血清成分に与える効果
博士（歯学）	清水 寿男 （口腔生命科学専攻）	クロールヘキシジンポケット内投与による臨床および細菌学的変化の研究
博士（歯学）	中曽根 直弘 （口腔生命科学専攻）	ラット発生歯胚における熱ショックタンパク質 (HSP)-25発現と細胞増殖との関係 1. An immunohistochemical study of the expression of heat-shock protein-25 and cell proliferation in the dental pulp and enamel organ during odontogenesis in rat molars. ラット臼歯発生過程における歯髄およびエナメル器における熱ショックタンパク質 (HSP) -25と細胞増殖の免疫組織学的研究 2. The relation between the expression of heat-shock protein-25 and cell proliferation in the rat developing tooth germ. ラット発生歯胚における熱ショックタンパク質 (HSP)-25発現と細胞増殖との関係
博士（歯学）	本田 朋之 （口腔生命科学専攻）	Effects of <i>Porphyromonas gingivalis</i> antigens and proinflammatory cytokines on human coronary artery endothelial cells （ヒト冠状動脈血管内皮細胞における <i>Porphyromonas gingivalis</i> 抗原および炎症性サイトカインの及ぼす影響）
博士（歯学）	渡邊 寛 （口腔生命科学専攻）	Effects of CO ₂ Laser Treatment Combined with Scaling and Root Planing on Periodontal Pockets of Chronic Periodontitis Patients. （慢性歯周炎患者の歯周ポケットに対する炭酸ガスレーザーとスケーリング・ルートプレーニングの併用効果）
博士（歯学）	子田 浩 （口腔生命科学専攻）	下顎の側方滑走運動記録法の違いが下顎後退及び平衡側顆路に与える影響
博士（歯学）	丸山 満 （口腔生命科学専攻）	実験的に付与したリンガライズド・オクルージョンの食物動態評価
博士（歯学）	山崎 学 （口腔生命科学専攻）	Basement membrane-type heparan sulfate proteoglycan (perlecan) and low-density lipoprotein (LDL) are co-localized in granulation tissues: a possible pathogenesis of cholesterol granulomas in jaw cysts （肉芽組織においてパールカンと LDL の局在は一致する：顎骨嚢胞のコレステロール肉芽腫の形成機序としての可能性）
博士（歯学）	小川 亮一郎 （口腔生命科学専攻）	Capacity of Dental Pulp Differentiation after Transplantation （移植歯における歯髄分化能についての研究）
博士（歯学）	中西 義崇 （口腔生命科学専攻）	The Expression of VEGF in Mucosa Substitutes 培養複合口腔粘膜における血管内皮細胞成長因子 (VEGF) 発現
博士（歯学）	白根 和明 （口腔生命科学専攻）	高齢者集団における CPI と LA 評価法 (WHO) の有用性および歯周健康状態に関する 5 年間の縦断研究
博士（歯学）	鈴木 晶子 （口腔生命科学専攻）	Development of the Articular Cavity in the Rat Temporomandibular Joint With Special Reference to the Behavior of Endothelial Cells and Macrophages （ラット顎関節関節腔の発生過程—特に血管内皮細胞およびマクロファージの動態—）

博士の専攻 分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	陳 鳳 山 （口腔生命科学専攻）	Anchorage effect of various shape palatal osseointegrated implants: A finite element study （矯正用パラタルインプラントの形状の違いとその固定効果について：有限要素法による研究） Anchorage effects of a palatal osseointegrated implant with different fixation: A finite element study （矯正用パラタルインプラントの植立状態の違いと固定効果について：有限要素法による研究）
博士（学術）	河 端 恵美子 （口腔生命科学専攻）	更年期女性の生活及び健康上の問題についての分析—女性外来の調査から—
博士（学術）	白 石 葉 子 （口腔生命科学専攻）	移乗介助動作における腰部負荷の検討—ベット上仰臥位からポータブルトイレまでの移乗介助について—



平成17年度 大学院医歯学総合研究科論文博士取得者

博士の専攻 分野の名称	氏名	博士論文名
博士（学術）	鈴木 昭	介護認定申請者における要介護度別歯科疾患の実態および歯科的治療ニーズに関する研究
博士（歯学）	田中 礼	CT Findings of Chronic Osteomyelitis Involving the Mandible — Correlation to Histopathological Findings — (慢性下顎骨骨髓炎のCT所見—病理組織像との比較検討—)

